

## 053 「あなたは、死と死後に受ける裁きの準備は出来ていますか？」

マラナサ・グレース・フェロシッパ 菊地 一徳氏

では、今日のメッセージの題目は、「あなたは、死と死後に受ける裁きの準備は出来ていますか？」というタイトルでお届けしたいと思います。死について考えて頂きたいと先に申し上げましたけれども、死ぬだけではなくて、死んだ後に誰もが神の前に立つようになります。聖書によれば**ヘブル 9：27**にこう書いてあります。

「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定められている」と

死ぬことは確実です。100%の確率で誰もが死にます。これ程確かなことは他にはありません。でも、それと同じように死後に裁きを受けるということ、神の前に死んだ後ここにいる全員は立つようになります。そしてそれぞれの行ないに応じて神の裁きを受けるんです。これも死と同様100%確実なことであると聖書には記されております。これを聞いて、「何か脅されているようで、怖いな」と思われている方もいらっしゃると思いますが、聖書の言葉は真実であります。これは人が創作したものとは違います。世の中には人が創作した、いわゆるファンタジーのようなものが多く存在します。あとでその辺には、また詳しく触れていきたいと思いますが、いわゆる人間の作った宗教です。宗教にも死後の世界を描くものがあります。でもそれは、果たして本当のことでしょうか。真実でしょうか。それとも人間が編み出した都合の良いような空想の世界なのかどうか。聖書はそれとは全く異なるものだということも、後で触れたいと思います。で、まずは、皆さんの週報の方に目を留めて頂きたいと思いますが、そこに聖書の言葉が最初にいくつか出ています。人は誰も死ぬといいますが、分かっていながら自分は例外だとどこかで思い込んでいる節があります。年寄りも死ぬだろう、でも自分はまだ若いし、まだまだ夢があるし、やりたいことがあるし、老後のことも考えているし、今死ぬとはとても考えられない。でも年齢順とは限らないということは、先程からお伝えしている通りであります。で、先ず**ルカの福音書 12章の 15～21節**のところを読みたいと思います。

そして（イエスは）人々に言われた。「どんな食欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。それから人々にたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作であった。そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』そして言った。『どうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。』」しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとおりです。」  
(ルカ 12：15～21)

そして次に

聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町に行き、そこに一年いて、商売をして、もうけよう」と言う人たち。あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのよう

なものです。あなたがたは、しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません。むしろ、あなたがたはこう言うべきです。「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。」(ヤコブ4：13-15)

今晚が私たちの命日になるかもしれないと言っているんです。私たちは今晚の自分すらどうなるかわからない者です。確実に今晚生きてると断言出来ない者だと、言っているんです。今日の礼拝の帰り道、車の事故で死んでしまうかもしれません。あるいは脳卒中とか心筋梗塞とか急な病気でポックリ死んでしまうかもしれません。この週報にも、いろいろな死因というものが、統計学によるものも記されていますし、また日本人の死因の主なものも挙げています。そういったものも是非参考にさせていただいて、私たちはいつか死ぬ者ですけれども、今死んでも不思議ではない者だということも忘れてはいけません。

そして、先週は MGF では葬儀がありました。その葬儀の時にも皆さんは考えると思います。いつか自分の番が来るということ。伝道者の書7：2に

**祝宴の家に行くよりは、喪中の家に行くほうがよい。そこには、すべての人の終わりがあり、生きている者がそれを心に留めるようになるからだ。(伝道者7：2)**

祝宴の家、パーティー会場に行くよりも、披露宴の会場に行くよりも、むしろ喪中の家に行くほうが、もっとためになると。結婚式に参列するよりも、葬式に参列した方が有意義であると、聖書は言っているんです。勿論そのようなお祝い事を否定しているわけではありません。そうではなくていつまでもそのようなパーティーは続かないということです。人生はいつまでも順風満帆ではいかない。いつか私たちは死にます。そのことを忘れてしまうと、目の前のことに心奪われて実に刹那的な生き方になってしまいます。今さえ良ければそれでいい。今やりたいこと、今好きなこと、それさえ出来ればいい。またはもう今晚死ぬかもしれないのに明日のこと、来年のこと、老後のことばかり考えているわけです。むしろ死後のことを私たちは考えるべきだということです。でなければ私たちはその時、必ず後悔するからです。行き成り余命宣告を受けたらどうするのでしょうか。慌てふためいて、取り乱して、パニックって、「やりのこしたことがある。」、未練ダラダラ。それよりも「いつでも死ぬ準備が出来ていますと、いつ声がかかっても構いません、いつ余命宣告を受けても私には準備が出来ています。そのように今までも生きてきましたし、そして死後についても何の恐れも不安もありません。」と、そう言える人は幸いであります。そう言える人は、イエス・キリストを信じている人であります。なぜならばイエス・キリストは、死んで甦られた方として私たちに死後の世界をどのようなものか見せ、そしてそこに連れて行って下さると約束されているからであります。

今からちょっと普段とは違うことをしたいと思いますので、心の準備をして下さい。どういうことかと言いますと、私の友人の森繁昇さんという人の歌を CD で流したたいと思います。彼の曲で「君は死んでいく用意はできているか。Ready to die.」という曲を今から聞いて頂きたいと思います。

**森繁さんの「君は死んでいく用意はできているか」を流す。**

名曲だと思います。とてもよくできている歌だと思いますね。この曲の最後の方で「君は造り主に会う用意はできているか」神と言っても私たちが造られたお方です。そして歌の中にも歌詞がありましたが、この造り主が私たちが愛して、そして私たちがただ死んで滅んでしまうことを望まずに、むしろ永遠の命を受けて死んだ後も裁かれずに、罪に定められずに、神の国・天国に行けるように、そのような救いというものが備えられているわけです。でもこの救いを受け取らずに死んでしまえば、私たちは神の裁きをうけ

なければいけません。どんなに良い人でもどんなに悪い人でも、主は平等であります。聖書によれば「罪から来る報酬は死です。」とあります。この死は、どんなに善行を積んでも、どんなに頑張っても、どんなに人にほめられても、免れることはできません。自分で自分を救うことのできる人は、この世界にはいませんし、神の前に「無実です。潔白です。何のしみもしわも傷ありません。パーフェクトな者です。」と大胆に言い切れる人は一人もおられません。聖書によれば「義人はいない。」正しい人はいないということですね。「ひとりもいない」といっております。であるならば私たちは神の前にそのままであれば裁かれなければいけないということです。

で、もう少しですね、今からお話していきたいと思うのですが、特に日本の社会は「死」というとすぐに、まあ「葬式」というと仏教の死生観、あるいは仏教で説かれている死者の裁きについて考えるかと思えます。昔から親の世代も、またその親の世代も「葬式」と言えば、仏式、まあ「葬式仏教」と言いますね。で、そのあとに死んだ人は裁きを受けるということも日本の仏教の教えにありますから、そのような裁きを免れるように、厳しい裁きに会わないように、生きている者たちが追善供養するわけです。亡くなった人がこれ以上苦しまないように、もっと楽なところへ行けるように、それが所謂「仏事」というもの、「法事」というもの、「供養」というもの、「冥福を祈る」ということですね。一生懸命仏壇に手を合わせたり、お坊さんに有難いお経を読んでもらったり、高いお金を払って戒名をつけてもらったり、立派なお墓を作ってあげたりとか、そういうことをして何とか死んだ人が裁きに会わないように、その裁きが少なくとも和らいで、もっと楽なものになるようにと、いうことをするわけです。

で、それは勿論キリスト教の聖書で説くところの「死後の裁き・死後の世界」とは全く別物であります。そのことを少しだけ、知っているようで知らないと思われる日本の仏教で説かれている「死者の裁き」について皆さんに簡単ではありますが、サラッとお伝えしたいと思うので、興味のある方は是非メモしてみてください。普段から私たちは何も考えずに、「これはもう伝統だから、それはもう昔から先祖が守り行ってきたことだから」、若しくは「もう自分の家は、代々の仏教で檀家だから」ということで、そういう仏事にも何も考えずに携わって来られたと思います。それについて今一度考えて頂きたいと思えます。「死」について、「死後の裁き」について。そして私たちがそれらにまつわるいろんな宗教儀式・儀礼というものに預かってきていますが、ちゃんと向き合っていて考えていきたいと思っております。

大体、昔から「悪いことをしたら、死んだ後に地獄の閻魔大王に舌を抜かれるよ。」、なんて皆さんも言われて育ったかもしれません。死んだら閻魔大王に裁かれると。で、そのような閻魔大王について実際に仏教では何と説いているのか。まあ『往生要集』という仏典があるんですけども、それは仏教でいうところの「死後の世界」を説いている經典となっております。でもそこには実は、『閻魔大王』という名前は見られません。そうではなくて、『地藏十王経』という經典があつて、これは誰が書いたのかは不明です。おそらく日本人が書いたと思われるもので、先祖供養とか死者を大切にす中国の儒教が由来ではないかと言われております。仏教が中国を渡った時に儒教化したわけです。ですから、もともと仏教というのは『輪廻転生』を説いていますから、死者を大切にすとか、供養するという考えはなかったわけです。それを大切にすのは儒教ですね。ですから仏壇というのはこれは仏教のものでなくて、儒教のものです。位牌も仏教のものでなくて、儒教のものです。お墓も仏教のものでなくて、儒教のものです。仏教にはそのような「仏壇」とか「位牌」とか「お墓」を必要としない、死んだら生まれ変わるだけです。供養もいらぬわけです。よく考えると、馬鹿らしいことですね。仏教でどうしてそんな高いお金をだして「戒名」を買わなければいけないのか。そんな豪勢な仏壇をなぜ持たなければいけないのか。なぜ、これを守らなければいけないのか。なぜ、お墓参りしなければいけないのか。仏教の教えによれば、本来はもう「輪廻転生」ですから、そこにはないわけです。他のものに生まれ変わっているわけですね。それは勿論真実とは言えないですけども、そのような教えがいつの間にか仏教の中に付加されていった。それは、イ

ンドからずっと大陸を渡って、いろんなアジアの宗教ですね。儒教もそうですし、道教なども相まって、そして日本の土着のアミニズム信仰とかシャーマニズムといったもの、それが全部混合されて今の日本の仏教になっているわけです。ですから「昔からうちは仏教徒だから。」とんでもありません。昔からではありません。そのような仏教も実は江戸時代にすべての人に押し付けられたもの、強制されたものであります。キリシタン弾圧のために徳川幕府が仏教を国教として、すべての人は檀家とならなければいけない。すべての家には仏壇を置かなければいけない。葬式は必ずお寺でお坊さんと呼んで仏式で行わなければいけない。それが葬式仏教の始まりです。(禁教令と寺請制度)

「でもうちには神棚があります。」それは明治に入ってから『<sup>はいぶつしやく</sup>廃仏毀釈』で、今度は寺ではなくて神社。そして、すべての家には神棚を置かなければいけない。国家神道ですね。でも長年ずっと仏教できているわけですから、両方が残ったということです。ですから、昔から先祖が大事にしてきた、ということじゃなくて、強制されてきた、というのが正確な表現であります。こういうことを言うと不快に思われる方もいると思いますけれども、実際に仏教の何を信じているんですか。仏教のどの教えを信じているんですか。そのことを問われた時に彼らは答えきれないと思います。そんなことをして意味があるんですか。仏壇に、位牌に、お墓に何の価値があるんですか、仏教徒として。本来は仏教徒として何の価値もありません。でも僧侶は「それを大事にしてください。」と言っています。それはお金のためです。法事がなければお寺はつぶれるんです。後で話しますが、それも日本のお坊さんたちが丁度キリシタン弾圧の時代に作り上げたシステムです。どの家も檀家となって、必ずお寺に結びついて、お金を払わないといけないわけです。それが腐敗化していく一端となったわけです。

で、その『<sup>じぞうじゅうおうきょう</sup>地蔵十王経』というものには、閻魔大王のことが書いてますが、それは恐らく日本人が書いたものだと言われております。人が死ぬと死後に裁きを受けるということが書いてあるわけです。まあ、恐怖心を煽って宗教に縛り付けようとする、そういった教えが仏教には無かったんですけれども、後から入って来たんです。キリスト教も影響を与えています。バラモン教やまたゾロアスター教といったいろんな古代の宗教も実は仏教に影響を与えています。ですから、人は死んで裁きを死後に受けるというのも、キリスト教・聖書の中にもあるのは、共通していると思うかもしれませんが、仏教の方がそれを取り入れていったわけです。『輪廻転生』だと宗教家はお金にならないわけです。死んだら別に葬儀もしなくていいわけです。別のものに生まれ変わるだけですから。

ですから仏教の開祖の釈尊は、ゴータマ・シッタルダは、「自分の葬式は弟子たちにあげないように。」(「お前たちは修行完成者の遺骨の供養(崇拜)にかかずらうな。)」とかかわりあってはいけない、葬儀はするなといったわけです。体は焼いて灰にしてガンジス川に流してくれと、お墓もいらないと云った訳です。そんなものに縛られてはいけない、それが本来の仏の道だと説いたわけです。でもそれに執着して、数々の行事を行って、さらに有料でお金をとって行く。それは完全なる墮落であります。ついこないだニュースでタイのお坊さんが、敬虔な仏教国のタイでは、妻帯は許されないわけです。でもニュースとなったのはお坊さんがある部屋を借りてそこに女性を囲っていたと。そこに警察が乗り込んできて、逮捕されて僧籍を失ってしまったという、そういうニュースを皆さんご覧になったと思いますけれども、別にそれを日本で見ても何とも思わないわけです。お坊さんは別に結婚しているし、お坊さんが権堂に通っているとか、あるいは風俗店に通っているなんてことを聞いても、別に驚かないわけです。生臭坊主という話で片づけられてしまうわけです。でも、本来原始仏教に近いタイとかチベットでは、お坊さんというものは世俗のものとは一切関わりを断つわけです。なぜならば釈尊が悟りを開く際に、結婚していたんですが妻も子供もみんな捨てたんです。結婚してはいけないんですね。むしろ結婚していたならば捨てないといけないというのが、本来の仏教の教えですから、結婚するなんてとんでもない、これは釈迦の生き方にも教えにも反することだというのが、本来の原始仏教であります。

で、話を戻したいと思うんですが、その『死後の世界』は本来は輪廻転生ですから、仏教の教えにはないわけです。でも後から『地蔵十王経』<sup>じぞうじゅうおうきょう</sup>というものがつくられて、いろいろな教えが付加されていったわけです。簡単に先ずよく日本人が、法事に関わるものとして皆さんにお伝えしていきたいと思います。

死んだ後、第1審査が先ず行われます。それが初七日（しよなぬか）に行われます。まあそこに王様が出てくるんですね。『閻魔大王』というのはインド由来の名前ですけども、あとの王様の名前は全部中国名です。で、絵なんか見るとみんな中国服を着ていますから、もともとこれはインドの教えじゃなくて、中国の教えだということが分かります。で、その初七日には、『秦広王（しんこうおう）』という王様が書類審査をするということです。いわゆる閻魔帳が開かれるということです。生前行った悪事の詳細、それが克明に記録されています。それが初七日に行われます。

第2審査が、二七日（ふたなぬか）、14日ですね、死者が死んでから二週間経ったら、今度は『初江王（しよこうおう）』という王様の所に連れて行かれます。で、三途の川を渡るという関門が待っています。で、そこでは身ぐるみ剥がされてしまうわけです。で、川には橋がかかっているんですけども、悪いことを沢山した人は、その橋が糸のように細くなってそこからすぐ落ちてしまうと。綱渡り状態ですね。落ちる度に、もう渡り切れずに苦しい思いをされるということです。で、その時に地上では、遺族は何をするかといいますと、焼香するわけです。線香を供えるわけです。で、煙を焚くわけですね。それをするのは、実はその三途の川で苦しんでいるその愛する人たちを助けるために栄養剤としてその煙が働くそうなんです。スタミナドリンクとしてその煙が役にたつそうです。ですからクリスチャンが葬儀の場で焼香をしないなんてことになったら、「とんでもない」と「三途の川で苦しんでるじゃないか」とドンドンジャンジャン煙を焚けということになるわけです。ですから彼らは、勿論そう言いながらもそんなことを本気で信じている人は、ひとりもないはずであります。これはすべてキリシタンが弾圧された時代、徳川幕府の時代に押し付けられた風習です。仏教にはもともとそのような風習はありません。敢えて言えば遺体が腐敗して腐敗臭が出るので、焼香で香りを出して消臭剤として使うということはありません。あとは死者を礼拝するという偶像礼拝の行為としても行われていたわけです。それをしないのは皆キリシタンであると、摘発するのに使われた回し焼香、焼香しない人は全員キリシタンであると。まあそういうことで日本に定着したんですね。ですから仏教の葬式にそもそも焼香が必ず伴うということもありませんし、仏教はそもそも葬式をしない宗教なんです。

で、話を戻したいと思います。今は初七日終わって、二七日、14日経ちました。で、第3審査は三七日（みなぬか）21日ですね。今度は『宋帝王（そうていおう）』という王様によって裁きがなされます。その法廷には猫と蛇がいて邪淫すなわち性的な不道徳を行った者、不倫だとかそうした性的な罪を行った者に対する審査が行われます。で、猫に噛みつかれて、蛇に締め上げられるという苦しみが待っています。

で、第4審査は四七日（よなぬか）28日目で、『五官王（ごかんおう）』に裁かれます。ここには秤がありまして、生前の罪の重さが調べられということです。

で、第5審査は五七日（ごなぬか）35日目です。いよいよ『閻魔大王』の登場となりますが、死者の一切を仕切るのが、この閻魔大王で、この閻魔大王が直々に裁くのが35日目です。浄玻璃<sup>じょうはり</sup>という鏡がありまして、それは今で言えば生前の様子がビデオで監視されて録画されたものをモニターに映されると、鏡にそれが映るというそういう裁きですね。

で、第6審査、それは六七日（むなぬか）42日目で、今度は『変成王（へんじょうおう）』という王様が裁判をして、先程挙げた『五官王（ごかんおう）』の秤と『閻魔大王』の鏡を再度用いて、再審査をいたします。

で、最後に第7審査、これは七十七日（しちしちにち）所謂49日ですね。最終決定がなされます。で、その時には『泰山王（たいざんおう）』が判決を下します。この判決によって六種類の刑罰、六種類の世界

に送られるということになります。それは『六道（ろくどう・りくどう）』とも言います。これはもちろん釈尊が教えたものではなくて、ヒンズー教とかバラモン教をベースとした教えであります。で、そこに先ほどお話ししたようなゾロアスター教とか、またキリスト教の死後の世界の思想、それも相まって作り上げられた空想のもので、六道、そしてそれが輪廻転生の中で目まぐるしく、入れ替わり立ち代わり、いろんな世界に移動していくわけです。それを『六道輪廻』とも言いますね。

で、その『六道』、六つの世界というのは、『地獄界』、『飢餓界』、『畜生界』、『修羅界』、『人間界』、『天上界』という6つですね。

で、この『餓鬼界』、お盆の時にも関わりますね。先祖がこの『餓鬼界』でひもじい思いをしているわけです。で、お盆の時にはお迎えして、そしてご飯を差し上げるわけです。でもずっといてもらっては困るので、またこの『餓鬼界』に送り返すわけです。先祖を大事にしているどころか、迷惑だからご飯を食べたら帰ってよ、またそこで1年間ひもじい思いをして、苦しい思いをして、そしてまたお盆にお迎えして、そして灯籠で流して返していくという、くだらない儀式ですね。先祖を大事にするどころか、真逆のことをしているわけです。で、その『餓鬼界』ですけれども、食べ物があるのに食べようとすると火になってしまう。水があるのに水を飲もうとすると火になってしまう。大変苦しい世界だということです。で、そこで餓鬼というのはまさに鬼ですね。その餓鬼は長く伸びた自分の髪の毛が刃物となって体を傷つけて、ある餓鬼は自分の頭蓋骨を割って脳ミソを出して食べたり、またある女の餓鬼はですね、毎日子供を5人づつ出産してそれを食べたりと、そういうおぞましい世界です。そこにいる先祖がお盆になったら帰ってくるわけです。で、またそこに帰ってよと。

で、『畜生界』、動物の世界ですね。弱肉強食の世界です。使役動物、牛や馬に生まれ変わった者はまた人間にこきつかわれるという生活をさせられます。

で、『修羅界』、これは戦いに明け暮れる世界で、自分はいつ殺されるかという恐怖にいつもおののく世界です。

で、『人間界』、これは人間の世界です。死んだらまた人間に戻る。それは滅多にないことですね。でも人間になったところで苦しみがあります。仏教には四苦八苦あるわけですね。内外の苦しみがあります。内の苦しみというのは病気だとかそういったもので、外の苦しみというのは対人関係とか社会生活の上で苦しむということ指すということですね。

で、最後に『天上界』、これが快樂の極み、いわゆる極楽です。仏国土ですね。もちろん極楽とか仏国土という所謂キリスト教でいうところの天国は、釈尊の教えにはありません。仏教の葬式に行っても、よく「故人が天国に逝きました。」なんてスピーチをする人がいますけれども、『天国』という言葉はキリスト教用語です。これは口語訳聖書に使われている言葉で、新改訳聖書には『天の御国』とか『神の国』という表現になっておりますけれども、『天国』というのはキリスト教の説く世界のことです。ですからキリスト教徒でもない人が「死んだ人は天国に逝った。」なんてことは言えないのであります。でも「極楽に逝った」とか「西方浄土に逝った」とか「仏国土に逝った」とか言ってもそのような教えは、実は釈尊の教えにはなかった、後から付けられた創作だということです。

で、この6つの世界を渡り歩く区切りがそれぞれ『死』です。ですからずっと死んだあともいろんなものに生まれ変わりながら、いろんな世界を渡り歩くわけですね。死ぬ度にコロコロ変わるわけです。で、良い行いを積んでいけば、ましな世界、もっと楽な世界に移される、引っ越しができるということ、その間を49日の中でずっと裁きを受けながら、その6つの世界にそれぞれ振り分けられていくのであります。ですから、少しでもましな世界に生まれ変わることができるように、移動できるように、一生懸命遺族は拝むのであります。

で、他にも実は、死後の世界を教えている仏教の『往生要集』というところには、八種類の地獄がある

とされています。『等活（とうかつ）地獄』。これは殺生したものが墮ちる地獄ということで、お互いに鉄の爪で傷付け合い、骨になるまで戦うという地獄です。殺されてもまた生き返って、また責め苦が続けられるという世界。で、『黒縄（こくじょう）地獄』。殺人者や自殺者が行くところで、高熱に熱した鉄板の上で鯛焼きのように焼かれていくという世界。で、『衆合（しゅうごう）地獄』。それは邪淫した者、不倫などの性的罪を行った者が墮ちる地獄です。山と山の間で押し潰されたり、山の頂上に美女がいて男が登って行くと山の木の葉が刃になって体を切り刻むというもの。で、『叫喚（きょうかん）地獄』。殺生、盗み、邪淫、飲酒の者が墮ちる地獄で、溶けた銅を口から流し込まれたり、体の内部から虫に食べられるという地獄です。お坊さんでも酒を飲みますね。でも飲酒の場合は口から銅を流し込まれるということです。で、『大叫喚（だいきょうかん）地獄』。これも殺生、邪淫、大酒、そして妄語、すなわち嘘つきの者が墮ちる地獄です。舌を抜かれてしまうんですけど、またすぐに舌が生えてきて、その舌をまた抜くという地獄です。で、6番目が『焦熱（しょうねつ）地獄』。これは先に挙げた悪行の他に、邪見という間違った考えを固守したものが墮ちて、今までの1～5の地獄よりもはるかに熱い数千倍に熱せられた熱の中で鉄の棒で叩かれたり、突かれたり、肉団子にされたり、ミンチボールにされるという地獄です。で、『大焦熱（だいしょうねつ）地獄』。以上の罪の他に仏教信者を殺したり、性的に辱めた者は、この大焦熱地獄に墮ちるといいます。体の皮膚を剥ぎ取られた上、熱湯のように鉄を溶かしたものをかけられるということ。で、8番目が『無間（むげん）地獄』。地獄の最下層ですね。辺り一面火ばかりの世界だということです。で、この他に『大般涅槃經』という仏典の中に、『八寒地獄』があります。八つの寒い地獄も待っているわけです。で、他にも『血盆經』というものの中には、血の池の地獄でお産で死んでしまった女性が宿業のために墮ちる姿が描かれています。以上が特に日本の仏教で言われている、死者の逝く主な地獄です。そんなことを聞いたら、誰もが行きたくない。で、それを聞いたら一生懸命おじいちゃんのために、おばあちゃんのために供養しなきゃ、拝まなきゃ、冥福を祈らなきゃ、一生懸命仏壇に手を合わせて、線香を焚いて、そしてお墓参りをして、ちゃんとお坊さんと呼んで法事をして、ということになるわけです。まあ、それが初七日から始まって四十九日迄。で、それを越してしまっても、四十九日に間に合わなくても、七回忌とか、十三回忌とか、十七回忌とか、最後は五十回忌、そういったものが、「まだ後からでも間に合いますよ。」ということで、これも日本の僧侶たちが檀家を寺に結びつけるために考案したシステムです。そんなものは仏教の教えにはありません。で、もちろん閻魔大王の牛耳る死後の世界、死者の裁き、これはほとんど荒唐無稽な作り話、漫画チックなファンタジーの世界でしかありません。

一方で聖書はどうなのか。比較をしていきたいと思うんですけども、仏教には聖書にあたるものは存在しません。いろいろな宗派が仏教にはあります。で、それぞれの宗派がそれぞれの経典・仏典を持っている訳です。天台宗とか日蓮宗は『法華經』です。その『法華經』というのは、丁度新約聖書の書かれた時代位までさかのぼることができるそうです。これ以外は認めないという厳格な宗派もあります。でも旧約聖書は、新約聖書よりもっと古いですね。1500年も前に書かれているものですから、仏教の仏典というのは比較的新しいものであって、時代時代に書き換えられたり、書き加えられたり、省かれたり、いろいろな創作物語がそこに付加されていった訳です。で、浄土宗や浄土真宗においては、浄土三部經というものがあって、それぞれ『無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』ですね。親鸞の歎異抄なんかは、その中でもまた別格として重要視されております。で、真言宗では『大日經』とか『金剛頂經』。で、禅宗、臨済宗とか曹洞宗では、そのような仏典すら無い。ひたすら座禅するだけ。曹洞宗の道元などは、もう念仏も上げない、焼香も焚かない、拝礼もしない、そんなことをしたら「喝」と言われるという。同じ仏教でも全然違う訳です。お経も読まない訳ですね。

ですから仏教と言っても、もういろいろなものがあって、もう内部はバラバラ。もう仏教何てものはむしろ存在しないと言ってもいいかもしれません。全部仏の教えからは、かけ離れたものばかりです。拝む

対象も違うわけです。善光寺に行って阿弥陀仏と言っても、他の宗派では阿弥陀仏は礼拝の対象では無いわけです。で、阿弥陀仏というのも架空の人物ですから、作り上げた存在です。実体は無いものです。お釈迦さんは実在したと言われてはいますが、でも聖書はどうでしょうか。聖書は66巻から成っています。旧約は39巻、新約は27巻。で、聖書は最も古い文書として、最も信頼のある権威のある文書として普及しております。その辺の古文書とか、権威ある書物と言われてはいるもの、いろいろありますけれども、聖書に比べるものは一つも存在しません。それは考古学上も、また文献学上も、書誌学上も、歴史学上も、様々な生物学や天文学、科学も含めて聖書はそれらにおいても信憑性のあるものとして、世界中の言語に翻訳されて、そして世界中の老若男女に読まれているものです。時代や世代を超えて。永遠のベストセラーとなっているわけです。一部の人にしか通用しないというようなものではないということです。時代時代で変遷してしまって、書き換えられたということもないわけです。真理というものは書き換えられてしまうものではありません。真理は変わらないものです。仏教には真理はありません。なぜならば仏教はコロコロ変遷しているからです。インドの仏教は、もはや日本の仏教とは異質のもの、変質したものです。タイのお坊さんは結婚できませんが、日本のお坊さんは結婚できます。それだけでも大きな違いです。葬式をする仏教もあれば、葬式をしない仏教もあるわけです。死んだら鳥の餌にすればいい。鳥葬です。あるいは灰にして流せばいい。でも後から、お釈迦さんは死んだら一体どこに行ってしまったのだろうか。きっと仏国土のようなところに行っているに違いない。他の宗教では、死んだ後さばきがあると説いている。他の宗教では、天国なるものがあると説いている。だから我々の師匠も天国に、そういうところに行っているに違いない。でも一応仏教だから、仏国土という名前にしよう。そうやって後からいろんな教えが付け加えられていったのであります。そして、聖書というものは、イエス・キリストを中心としたイエス・キリストを証言する書物であります。イエスは実在の人物であります。ただの人間ではありません。歴史的にもイエスの実在を否定する者は、今日ひとりもおられませんけれども、でもイエスは死んだんです。でも死んで終わったらお釈迦さんと同じです。他の偉人たちと一緒にです。孔子も死にました。お墓が中国にあります。で、お釈迦さんも死にました。「ちゃんと骨は、ガンジス川に流せ」と言ったのに、流されずに、世界中に、仏舍利塔に骨があります。掻き集めれば1~2トンあるそうです。ですからとんでもない話ですけれども。で、マホメットの墓もサウジアラビアにあります。で、イエスも死にましたから、「当然墓はどこかにあるだろう」と。確かにエルサレムにあります。そのエルサレムの墓は、ゴルゴダの丘というところの近くにありますが、からっぽです。そこには遺体も遺骸も遺灰も何もありません。なぜならばイエスは死んで葬られました。三日目に甦られたからです。「イエスの復活、そんなこともファンタジーじゃないですか。作り話でしょう。」と思われるかもしれませんが、未だかつてイエスの復活を否定できた者は、一人もおられません。もしイエスの復活を否定できたならば、日本にいるおよそ1万人位の牧師は、皆嘘つき呼ばわりされます。日本にあるキリスト教系のありとあらゆる機関、ミッションスクールとか、あるいはキリスト教系の病院だとか、いろいろな福祉施設とか、キリスト教ベースのいろいろな団体、いろんなグループがありますね。慈善団体とか。全部嘘つきです。全部嘘を説くカルト集団ということになりますから、そうなるとキリスト教は信じるに値しないとして、撲滅されてしまうわけです。ところが、未だかつてキリストの復活を否定できた者はいないわけです。釈迦も孔子もソクラテスもマホメットも、皆偉い人だったかもしれませんが、全員死んで葬られて、墓は今もあります。でもイエスは別格です。同じ聖人とか偉人の部類ではありません。イエスは、死んで祭り上げられて神にされたわけではありません。イエスはもともと神で、その神が人間となってクリスマスに生まれて下さったわけです。まあ12月25日とは限りませんが。おそらく9月の終わり頃だと思われますね。で、その後イエスは私たちと同じように幼子からずっと始まって、青年期を経て成人となられて、そして聖書に記録されているように、イエスは目に見えない神を目に見える形で完全に現して、一つの罪も犯さずに、神の子として、人の



子として、私たちの為に神を説いて下さったわけです。そして、ただ神のことを紹介して教えるだけでなく、イエスは私たちの罪を、罪が無かったのに十字架においてすべて背負って下さって、そしてその罪を贖う。この贖うということが、罪の罰を私たちが受けずに、イエスが代わりに罰を受けて下さるという概念です。罪の贖い、罪の赦し、それをもって私たちに救いの道を示して下さいたのであります。お釈迦さんは、私たちのあなたの罪を背負って、代わりに死んでくれたものではありません。マホメットにしても、孔子にしても、ソクラテスにしても然りです。彼らは、それぞれただの人間として自分たちの罪を抱えたまま死んでいった、ただそれだけの話であります。素晴らしい教えは説いたかもしれませんが、でも彼らは人を救うことは出来なかったんです。ただの人だったからです。私たちと同じように死んだら終わり、死んだらおじゃん、死んだらお釈迦、死んだらお陀仏、というものだったわけです。でもイエスは違いました。で、イエスを信じる者は、死んでも生きると、イエスはそう宣言されたのです。ヨハネ 11 : 25 にイエスが宣言されました。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。(ヨハネ 11 : 25)

イエスが嘘つきだったら、こんなイエスの宣言を真に受けてはいけない、信じたら損すると思うかもしれません。でもイエスは確かに死からよみがえったんです。それは歴史的な事実です。二千年経った今もこの事実は否定されてないんです。考古学の見地からも、聖書の記録文書としての価値からも、勿論イエスの復活は証明されて否定はされません。そのイエスがおっしゃっている言葉です。信憑性があります。説得力があります。力があります。それを信じる者は、イエスと同じように死んでも生きるのですと。

またイエスはヨハネ 14 : 6 で、

イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。(ヨハネ 14 : 6)

イエスを通さなければ、イエスを信じなければ、天の父のおられるところ、すなわち天国には行けないと、イエスがそう宣言されているんです。

「キリスト教は、考え方が狭い。辺境だ。排他的だ。他の宗教を認めない。イエス・キリストだけが唯一の救い主で、イエスを信じるほか天国に行く道はない。それはあまりにも考え方が狭い」と言うかもしれませんが、でもそれはキリスト教の考えではなくて、イエス・キリストの宣言そのものです。すなわちイエスの考えです。それはイエスの言葉です。イエスの弟子たちが、そのようにキリスト教を狭いものに作り上げた訳じゃないんです。イエスの弟子たちは、イエスのおっしゃったその言葉を額面通り受け止め、信じて従ってきた者たちであります。一方で、仏教のお釈迦さんの弟子たちは、お釈迦さんの言うことは真に受けなくて、死んだ後勝手にいろんなことを付け加えて、いろんな教えを新しく後付けして、そして全く似て非なるものですね、仏教といえ、仏の教えとは全く異なるものを、変質したものを作り上げてしまったのであります。それが時代を経て、大陸を経て、この島国日本にやって来まして、日本の仏教は大乗仏教だと誇って、お釈迦さんの説いた原始仏教は小乗仏教として見下げて、新しい方が優れているんだと。とんでもない高慢ですね。開祖の教えをねじ曲げて、そして造りかえて、創作して、別の教えにしてしまう。師匠を尊敬してるとは、とても言い難いですね。でもキリストの弟子たちは、そういったことをしなかったんです。一切聖書は書きかえられておりません。イエスの言葉通り、そのままそっくり記録されていったのであります。そのイエスがただ一人の救い主だと、自ら宣言されてますから、私たちもそれ

を信じる者であります。

「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定められている」と聖書は言っています。で、その聖書の中に、『天国の教え』、『地獄の教え』もあります。さっきご紹介した仏教の説く『六道』とは全然違う世界です。死んで、死後の世界に行き、そしてよみがえって、地上に戻ってきて、さらには復活した姿で天に上げられた、そのイエス・キリストの言葉が、この聖書の中に記録されているのであります。

ですから、「昔からうちは仏教です。日本人は皆仏教です。葬儀と言えどもこれは仏式です。」と言うかもしれませんが、矛盾したことをいっばいしているわけです。仏が説いてもいないような、いろいろな教えや儀式を熱心に行っているわけです。一生懸命手を合わせて、供養して、冥福を祈って。何にもなりません。

ゴキブリホイホイを仕掛けて、そこにゴキブリが引っ掛かった。「あっ、死んだおばあちゃんが引っ掛かっちゃったかもしれない。」そんなことを本気で思っていますか。日本人に問うて下さい。そんな『輪廻転生』。人格も無いような。ただ死んだ者が別のものに確かに物質で言うならば、先程の森繁さんの歌のように、犬が轆かれて何度も轆かれて乾いて、そして塵となっていく。人間の体も塵から造られています。ですから塵に帰ると聖書はそう言っています。でもそれは肉体のことです。肉体は、確かに塵から出来ています。土の元素からすべて成っていますから、聖書は実に科学的なんですね。でも人間の本体は、肉体にはありません。人間の本体は、その目に見えない中身、霊と魂です。そこは普段私たちは人格として感じているところです。ですから肉体の物質として、元素として、あるいはそれが素粒子として受け継がれていく、土に帰っていく。で、別のものにそれが取り込まれていくというのは、それは事実であります。でもそれは人間の本体ではないということですね。むしろ人間には、そのような人格的な部分があります。動物とは違う部分。それがゴキブリに変わるということは、ありえないということです。理解し難いことですね。そのような人格的な連続性というものが、輪廻転生の中でずっと繰り返されていくということは、先ず考えにくいこと、納得のいかないこと、納得のいく人は、蚊も潰せません。蚊に刺されても殺してはいけません。もしかしたら、それはあなたの愛する先祖かもしれないからです。

で、これで皆さんには大体、日本人が慣れ親しんできた仏教の死生観、死後観というものをお伝えできたかと思えます。同時に聖書の説く死生観、死後観についても多少は触れることが出来たかと思えます。

後は、最初の命題に戻りたいと思いますが、『あなたは死ぬ用意が出来ているか。死後、裁きを受ける用意は出来ているか』ということです。クリスチャンは、いつでも死ぬ準備が出来ています。いつでも死後、裁きを受ける準備が出来ています。『裁き』と言っても、別に恐れる必要はありません。誤解の無いようにして頂きたいと思えます。クリスチャンにおける死後の裁きというのは、もう自分の罪を罰せられるということはありません。なぜならばイエス・キリストが、あなたの罪を、私の罪を、十字架の上で負って下さったので、もう既に裁きは終わっているわけです。むしろクリスチャンは、自分の罪によって裁かれて罪に定められるのではなくて、クリスチャンとしてこの世で生きて、神の栄光のためにイエス・キリストの御名をあげて、キリストの素晴らしさを表すために行った一つ一つの行ないに対して神が報いて下さるといふ裁きが待っているんです。これは表彰されるような感覚でいいと思えます。罰せられるという感覚でなくて、むしろ褒め言葉を頂ける、褒章を頂ける、そういう裁きがクリスチャンには待っています。ですから、それは恐れるものではなくて、むしろ期待すべきもの、ワクワクすべきものですね。でもこの地上生涯を自分の為だけに生きた人は、そのような褒章は期待できません。救われているのに、クリスチャンなのに、毎日毎日自分の名前のために生きている。キリストの名前のためじゃなくて、自分の栄光のために生きている。神の栄光を表すんじゃなくて、自分の欲望のため、自分の夢のため、自分の必要のため、自分の栄誉のため、自分の家族のため、自分の仕事のため、もうそれだけに掛かりっきりで、与えられている命を、救って頂いた永遠の滅びから折角引き出して頂いたその尊い命を、ただ我がためにだけに、この

地上生活のためだけに、使った者は、死後の裁きにおいては報いは受けられない、ということを知って頂きたいと思います。もちろん天国には行けます。地獄には行きません。でも天では報われません。

それは、また別の話になるので、ここでは割愛しますけれども、そのクリスチャンは死ぬ準備が出来ていると言いました。死後の裁きを受ける準備も出来ていると、言いました。

で、最後に一人のクリスチャンを紹介してこの時間を閉じたいと思います。1909年、明治42年2月28日のことです。塩狩峠を走っていた列車の最後尾の連結が外れてしまって、その結果客車が逆行し始めました。その時その列車に乗り合わせていた長野政雄と言う人が、クリスチャンです、列車の下に身を乗り出して自らがその客車の下敷きになって、列車を止めて、乗客の命を救って殉職するという衝撃的な出来事がありました。塩狩峠の頂上付近には、『長野政雄殉職の地』という記念碑が建てられています。その記念碑には以下のような文章が刻まれています。

明治42年2月28日夜、塩狩峠に於いて、最後尾の客車、突如連結が分離、逆降暴走す。乗客全員、転覆を恐れ、色を失い騒然となる。時に乗客の一人、鉄道旭川運輸事務所庶務主任、長野政雄氏、乗客を救わんとし、車輪の下に犠牲の死を遂げ、全員の命を救う。その懐中より、クリスチャンたる氏の常持せし遺書発見せらる。「苦楽生死 均（ひと）しく感謝。余は感謝して全てを神に捧ぐ。」右は、その一節なり。 30才なりき

この長野政雄という人はクリスチャンだと言いました。で、彼は常にポケットの中に遺書を忍ばしていたわけです。いつ死んでもいい準備が出来ていたんです。口先だけではなくて、本気でいつ死んでもいいように遺書も普段から携えていたわけです。いつでも死ぬ。しかも自分のためじゃなくて、見知らぬたまたま一緒に乗り合わせた乗客のためです。どんな人たちかも知らなくても。でも彼は自分の命を投げ出して。まあ、そのようにしたら実際に列車が止まったかどうかは確信が無かったかもしれません。でも、きっと彼には神からの確信があったと思います。ここで命を自分が投げ出せば、列車は必ず止まると。で、実際に止まったんです。そうしなかったら、全員が死んでいたという、そういう大事故に、大惨事になるような状況だったわけですね。で、その遺言というのはこういうものでした。今、一部だけ記念碑に刻まれていたと言いましたが、まず第1に「余は感謝して凡てを神に捧ぐ。」第2に「余が大罪は、イエス君に贖われたり。諸兄姉よ、余の罪の大小となく凡て免されんことを。余は、諸兄姉が余の永眠によりて天父に近づき 感謝の真義を味ははれんことを祈る。」第3「母や親族を待たずして、二十四時間を経ば葬られたし」第4「吾家の歴史（日記帳）その他余が筆記せしもの及信書（葉書共）は之を焼棄のこと。」第5「火葬となし可及的虚礼の儀を廃し、之に対する時間と費用とは最も経済的たるを要す。湯灌の如き無益なり、廃すべし。履歴の朗読、儀式的所感の如き之を廃すること。」最後に「苦楽生死、均しく感謝。」これがクリスチャンです。苦楽生死。苦しいことも、楽しいことも、生きることも、死ぬことも。聖書には、『生きることはキリスト。死ぬこともまた益です。』という言葉があります。「余が永眠せし時は、（永眠と言ってますけれども、これはクリスチャンとしては実は不適切な表現です。永眠する訳ではないからです。）恐縮ながらここに認めある通り宜しく願上候 頓首 長野政雄 愛兄姉各位」という遺言が常にポケットの中に忍ばされてあったということですね。ですから、これが見つかったのでその通り遺言が施行されたわけです。で、この辺りのことは皆さんも読んだことがあると思います。三浦綾子の『塩狩峠』という小説にこれは事実をもとに書いてます。長野政雄という言葉ではなくて、実際にそこに登場するのは永野信夫という名前が登場していますが、長野政雄が本名です。ほとんど自分の書いた日記とか葉書は焼却処分してくれと言ってますから、なかなか沢山の資料は無かったんですけど、でも三浦綾子は彼の所属していた北海道の教会にこういう人物がいたということを知って、徹底的に調べ上げたのであります。

読んだことが無い方は、是非読んで頂きたいと思います。ベストセラーですからね。クリスチャン、ノンクリスチャンに関わらず、多くの方はこれを読んだと思います。で、そこに書いてあるのは、キリスト信者としての本当の姿です。で、そのキリスト信者としての本当の姿とは、イエス・キリストの姿を具現化するというものであります。イエスならばこのように生きるという生き方ですね。それが本来のクリスチャンの生き方です。で、今の遺言も『塩狩峠』の中にも収録されています。で、長野政雄がどのようにクリスチャンになったのか、その経緯もその『塩狩峠』の中に出ています。路傍伝道によって彼はイエス・キリストを信じる決意をします。そういう三浦綾子の書いた『塩狩峠』。映画化もされてますし、また外国の言葉にも翻訳されて、世界中にも読まれる本となっております。

イエス・キリストは、ヨハネ 6 : 47 でこう言われました。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。(イエスを) 信じる者は永遠のいのちを持ちます。

(ヨハネ 6 : 47)

ヨハネ 3 : 16 も皆さんが良く知っている、聖書で最も有名な聖句の一つ、福音の要約という箇所は、

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。(ひとり子とはイエスのことです。) それは御子を信じる者が、(イエスを信じる者が) ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ 3 : 16)

イエスを信じる者は永遠のいのちを持つんです。死んでも無くならない命です。だからいつでも死ぬ準備が出来るんです。地上には何の未練もありません。そして、イエスのために生きている者は、すぐにも世を去ることができます。「あーしておけば良かった。こうしておけば良かった。」という後悔はありません。もしあなたがイエスのように生きているならば、一点の曇りもない、微塵の後悔もない、最高に充実した人生を送ることが出来ます。でも、もしイエスのように生きていないならば、たとえクリスチャンでも死ぬ時になったら、取り乱します。「どうしよう。あの時、あーしておけば良かった。イエスのようではなかった。イエスのようには言わなかった。イエスのようには振舞わなかった。イエスのようには生きなかつた。イエスのようには死ななかつた。」その後悔はクリスチャンといえども残ります。でもこのことを今、神はこの時間を通して皆さんに語って下さっています。ということは、まだチャンスがあるということです。これを聞かずに今晚死んだら、多くの方は後悔して、クリスチャンでありながらも泣いて歯ざしりしたかもしれません。でも、今朝、神様はこの時間をあなたに備えました。今晚があなたの命日になるかもしれない。イエス・キリストを信じている者ならば、もう準備は出来ています。あなたの家族は、イエスをみんな信じていますか。あなたはイエスを信じて天国へ行く希望を持っているかもしれない。でもあなたの家族は、葬式をしてくれるあなたの遺族は、イエス・キリストを信じているのでしょうか。信じてなければ、きっと彼らは、仏教の葬儀をするかもしれません。あなたの遺言があっても無くても、するかもしれません。あればそれに沿ってやってくれるかもしれませんが、無ければ葬祭センターに頼んで、契約しているお坊さんがやって来て、そしてお経をあげて、高いお金をとられて、訳も分からないうちに、何百万というお金が飛んでいく訳です。で、そのお金は何の意味もない、どぶに捨てるようなお金です。そのために一生懸命働いて、そのために一生懸命貯め込んできたお金です。それが全部無駄になるんです。ですから、是非皆さんにも考えて頂きたいと思います。「あなたは今日死ぬ準備は出来ていますか。死後の裁きを受ける準備が、クリスチャンたちよ、出来ていますか。」ということです。で、もちろんイエスを信じる者は、今すぐ救われます。信じたその時点で救われます。十字架上で隣にいた強盗がイエスを信じて、

イエスはそんな彼にこう言われました。「あなたは今日わたしと共にパラダイスにいます。」と。今日です。信じた今日、あなたはパラダイス、天国にイエスと一緒にいく。それがキリスト教の救いです。死んだら、『六道輪廻』を経て、一生懸命良い行いを積んで、もう死んでしまった人は何も出来ないので、生きている人たちがそこで一生懸命『徳』を積んで、供養してあげて、そうやって何とか『天上界』まで。そんな救いじゃありません。イエスがすべての罪を十字架の上で贖って下さいましたから、それを信じるだけで救われます。そして、イエスは死から甦られた方ですから、イエスと共に永遠に生きる者となって、イエスのおっしゃっているその言葉通りのことがあなたの身に起こります。イエスを通して天の父のみもとにあなたは行きます。今日が命日でも、今日あなたは天国に直行出来るんです。他をあちこち回ったり、遠回りはありません。ですから、仏教で死んだら極楽に行ったとか、死んだら仏になったとか、天国にいった、それらは全部作り話で、何の根拠もありません。突き詰めて言うならば、何十億年という年を経なければ天上界には行けない。それが日本の仏教の教えです。だから死んだら絶望的です。ずーと何十億年と苦しみ続けるからです。でもイエスを信じている者は、そんなものから解放されます。もう恐れずに、縛られずに、この世にも執着しないで、いつでも死ねる準備が出来ている。これ程解放された、自由で満たされた人生は無いと思います。宗教は気休めでもお飾りでも何でもありません。私たちの生き様そのものとなります。そして、死に様そのものとなります。是非、どれが本物なのか、真理はどこにあるのか、見極めて頂きたいと思います。イエスは、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」とハッキリ宣言して下さいました。では、今日はこれで終わりたいと思います。